

終わらない物語と、物語の先にあるもの

瀬戸山 美咲

私は今、東京で暮らしながら、主に小劇場といわれる分

野で演劇の戯曲を書き、演出している。演劇を始めたのは二〇年前で、最初の一二年間は雑誌のライターをやりながら上演活動を続け、その後ライターを辞めて専業の劇作家・演出家となった。ライターを辞めるきっかけになったのは東日本大震災と福島第一原発の事故だった。それまで私はノンフィクションの力も物語の力も信じていたが、今は「物語」を書かなくてはならない時だと感じた。震災と原発事故でばらばらになったコミュニティには物語が必要だと思った。その物語とは、人々を同じ方向に向かせるような物語ではない。人々がひとりひとり自分と社会について考え始めるような物語が必要だと思ったのだ。では、果たしてそのような物語とはどんな物語なのだろう。その話をする前に、私が昨年上演した作品と、演劇の持つ特性について書きたいと思う。

女性の目線で戦場を見てみたら

昨年一〇月、下北沢のザ・スズナリで『わたし、と戦争』という作品を上演した。老舗劇団の流山児★事務所の依頼で、私が作と演出を担当した。プロデューサーの流山児祥さんから私が今書きたいものを書いてほしいと言っていたとき、私は「女性と戦争」のことを考えたいと思ってこの作品に取り掛かった。

始まりは、その前年に手にしたスヴェトラナ・アレクシエーヴィイチ作・三浦みどり訳の『戦争は女の顔をしていない』という本だった。第二次世界大戦に従軍したソ連の女性兵士たちの声を集めたノンフィクションだ。この本に私は衝撃を受けた。戦闘中に訪れた村で見かけた馬のことや、兵舎での女性同士のおしゃべりのことなど、これまでほかの戦争を描いた作品では触れたことがないことがたくさん描写されていたからだ。戦争を後ろで支えた女性たちではなく、戦闘の真っ只中にいた女性たちが見たものを彼